
夢学園

夢希 悪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢学園

【コード】

N5900H

【作者名】

夢希 悪

【あらすじ】

すぐにボケる柚子とそれに突っ込まなければいけない裕也…そんな二人が巻き起こすギャグストーリー…

プロローグ

「知ってる??この学校は不気味な噂があるんだよ……」

僕の隣でクスクスと笑う少女。

その姿は華麗とも言えようが、何か一つ違った。

「なんだよ、噂って……」

「実はね。。。」

少女は一回言葉を区切った。

一瞬、緊張が走る。

「夜な夜な、トイレを使う音が聞こえるんだって……」

「な、な、何だよ…怖くねーなあ…」

声が少し裏返る。

正直、怖い。

「ま、お金が無くて私が学校のトイレ借りてるからんだけど」

「お前が原因かあ!!!!!!」

鋭く突っ込みを入れる僕。

手は昔ながらの「何でやねん」だ。

「っていうのは嘘に決まってるよ。今、私が作った」

「最初からそういえよ…。無駄な体力使うだろーが…」

「まあ、私の家はお金持ちだからお金に困る必要はないのさ」

「あーハイハイ、ソウデシタネ」

突っ込むのが面倒くさくなつて棒読みで返す。

おっと・・・紹介が遅れたね。

僕はおおはし大橋ゆじや裕也。

少女は幼馴染の高木たかき 柚子ゆずだ。

柚子はボケる。すぐに、くだらないくらいボケる。

それを突っ込むのは僕なんだ・・・。

柚子は容姿は可愛いのに無駄にボケる。

僕は

「裕也はバカだよな」

「いや、顔じゃないし・・・」

「顔は ……(フイ)」

「何で顔を逸らすのかな!!そこまで酷い!!?」

「見てると吐き気が・・・」

「そこまで酷くないわ!!」

すぐそこにあつた、筆箱を投げる。

「いや…裕也つて女顔じゃん??」

「良く言われるけど・・・」

「うわ!!!自覚あり?ナルシ発言?」

「違うわっ!!!!!」

こんな僕たちだつて、青春はするんだ。

こんな僕らのくだらない学園ギャグ物語

…

第一話（前書き）

話が凄く変ですけど…

第一話

僕は学校へ向かっていた。
それはいつも通りの行動だが、どこかで必ずこじれる。
アイツの存在で…

ドタドタ

「なんだろ…この音ッ…！…！…！」

振り返ると、そこにはお約束のように…。

「やあ、裕也。おはよう」

「おはようじゃなくてさッ……どうしたの……それ」

柚子の隣にいる緑の生き物を指す。

柚子はその生き物の首に紐をつけていた。

まるで、犬の散歩のような格好だが…あまりにもギャップが…。

「ああ、タマの事？」

「タ…タマッ！？でも、さあ……それ猫じゃなくて……」

緑の生き物は ……

「ワニ……だよね??」

「すごいでしょう?」

すごい域を超えてるよ……。

だって、ワニって肉食でしょう?それに、まずここに居る方がお

かしいだろう…。

「でも、さ…学校に連れてくの？」

「当たり前じゃん(笑)」

最後の(笑)の意味が分からないんだけど…。

絶対、何かあるはず…!!良からぬ事があると思う。

「何、企んでるんだよ」

「べ、べつつに…」

「口笛で誤魔化すなよ!」と、お約束の突っ込む「口笛を吹いて誤魔化すなんてやり方、古いぞ…ツ!!!」

痛え…ツ!!

急に右手に痛みが走る。

か、噛まれた!!ワニに…痛いどころじゃない!!死にそうだあ!

7

「柚子、柚子!!手、手え〜!!痛い!か、か、噛まれてるう〜!

!…!!」

「?ああ…別に噛まれてないよ?」

「自分の手を見るなあ〜!!僕の手え!!…痛い痛い!噛まれてる

!!…タマにい〜!!…!!」

「????噛まれて無いじゃん」

「それは、左手え〜!!…!!僕のは右手え〜!!…!!」

!…!!」

「……………(フツ)」

「何で僕の手を見て笑うのかなあ〜!!」

今、僕の手はすさまじい事になっている…!!

血が…血があ〜!!…!!肉が見えるう〜!!

これじゃあ、朝のはずなのに深夜番組でしか見せられない…否、深夜番組でさえモザイクをかけなければならに状況にあるぞおー！！！！！

「笑うしか無いじゃないか」

「その前に、タマをどうにかしろおー！！！！！！」

第一話 タマ

「はい、これで大丈夫よ」

「ありがとうございます…」

僕は学校に全力疾走で向かい、さらに全力で保健室まで走っていた。
右手にグルグルと丁重に巻かれた包帯を見る。

「何があったの？朝のはずなのに深夜番組でしか見せられない…いえ、深夜番組でさえモザイクをかけなければならに状況だったわよ？」

「いや、僕もそう思ったんですけど…」

「あら、分かったわ。その顔は、登校中、高木さんに会ったのはいいけど何故かワニを犬の散歩のように連れてきていて、とりあえず

突っ込んで見たものの結局、ワニに噛まれた…って顔してるわよ」

僕って、いったいどんな顔してるんだろう…。

つか、なんでワニって分かったんだろう。柚子のことも…。

「だあって、先生が学校に来る途中、車の中で見てたんですもの」

「なんか先生、Sパワー入ってない!？」

「あら、失礼ね!！」

頬をプツと膨らます。

子供みたいだな…。

「そうですね。さすがの先生だって、そんな事 ……」

「先生は元からSなんですから あなたがいじめられている姿を見ていると…(ポツ)」

「頬を赤らめないでください!!今、僕はフォローしようとしてたのに!!!」

だめだ・・・この学園は狂ってきている…。

あはは、適当に笑って保健室を後にした。

ここは、僕にとって地獄なんだから…。

「あー…裕也、大丈夫か??」

「ま、痛いけどな」

「…………(フツ)」

鼻で笑うとか意味分かんないけど…。

顔は可愛いくせに生意気な…!!!!!

「柚子さあ…何もしなかったらもてるのに…」

「あらら、恥ずかしいわ」
「何か用ですか?？」
「そうだったわね…えと、そのお………」
「?????????」
「忘れちゃったわ」
「……………」
「先生つてど忘れしちゃうよね(ニコッ)」
「笑う事じゃないよね!？」

柚子と先生が加わると、突っ込むのが大変だ。

「あ、そうだ!?!ワニの肉、食べる??？」
「あ、食べるわッ!?!?!」
「だから、肉を食うな!?!?!」
「タマが可愛そうだろ!?!?!」
「…グワッ(ポッ)」

と、横から鳴き声が聞こえた。
横を見ると、緑色の生き物が…。

「タマあああああッ!?!?!?!?!」
「…グワッ?」
「あ、そこに居たの??？」
「食べたんじゃないの!?!?!??？」
「食べるわけ無いじゃん」
「グワッ」

ま、そうだよな。
大事な家族でもあるんだから。

第二話・学校

ワニ騒動で一日が大変だった。

あれが月曜日ならば、まだ学校はあるわけで…。
いつもの道をため息混じりに歩いていた。

「やあ、裕也」

「ぬわっ！！！！！！！！！！」

目の前から突然の柚子登場。

今日の登場はいつもよりマシな方なんだが…。

「なぜ、いきなり現れるんだッ！！！！」

「えー…だって普通に登場するとつまないじゃん?？」

「どうやら、柚子の頭の中はかの有名な「涼宮ハヒ」レベルの頭らしい。」

「いつか、神人とやらを登場させてしまいそうだ。」

「裕也はキヨ なわけ??？」

「さあな…って、人の心を何故読める!？」

「まあ小説だし??？」

「前回も言ったよね!？ダメだって散々言っただけだ!?!?!??？」

「って事は裕也はポニーテール萌えなんだね」

すると柚子は髪の毛を縛り始めた。

そして、ポニーテールにすると…

「どう?????萌える??？」

「なに長考してんのさ。馬鹿じゃないの??」
「お前のごとだよ!!!!!!」

と、突っ込むと柚子は顔を赤らめていった。

「そ、そんなに私のことが好きだったのね…嬉しいわ!」
「はあ!??」

「でも、今は登校時刻だから人が沢山いて恥ずかしいわ」
「ふざけんなあ!!!!!!誰が告白じゃあ!!!!!!」

すると顔をいつものにへら顔に変えた。
すぐに変わるこいつが怖え…。

「嫌だなあ…本気にすんなよ」
「お前がばら撒いてんだからなッ!!!!」
「朝から突っ込みまくると、咽がいかれるよ??」
「お前の頭がいかれてるんだろうが」

ため息まじりの突っ込み。
朝からこうならば学校なんか行きたくないよ…。

「サボりはダメだぞ、サボりは」
「お前のせいだろうが!!!!!!つか、人の心を読むな!!!!!!」

こいつは神か?ええ!!!神様よう…。
俺の意思は無視してこいつばかり優先かよ…!

「神は悪くない!!悪いのは私だ!!!!!!」
「知ってんならやんなよ!!!!!!そして、人の心を読むなあああ!!」
「!!!!!!」

そして、何とか学校に着いた。
下駄箱で靴を脱いで、上靴はいて階段を上る。
幸い、柚子とはクラスが違う。

「あら、裕也君おはよう」

「あつ、先生……」

保健室の先生だった。

昨日のはっちゃんが酷かったなあ。

「裕也君、トマト臭いわよ」

「その臭いは決して僕ではありません」

「あら、断言しちゃって……先生悲しいわ」

悲しむ必要が何処にあったんだろう……。

「そうそう、昨日言いたかったこと思い出したの」

「そうだったんですか??何でしょうか」

「実は明日、学校お休みななのよ、って言いたかったの」

「明日って事は……今日!!!!?????」

「ごめんなさいね。ど忘れしちゃったみたい」

休みに学校に来るなんて馬鹿みたいじゃないか!?

あれ、でも柚子は何で学校に来たんだろう……じゃなくて!!!!!!

!!!!!!

「早く言ってくださいよッ!!!!!!学校に来ちゃったじゃないですかッ」

「あら、期待を裏切らなくて良いじゃない」

「そういう問題じゃないです!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

つか、期待って誰のだよ!!!

はぁ、とため息をだして回れ右。

下駄箱で靴を履き替える。

「何処へ行くの??」

「帰ります」

「せつかく来たんだからお勉強しましょうよ!!」

「なんのですか!!」

「えー・・・保健体育の」

「いいません!帰ります!一人じゃ哀しいし」

「一人じゃないわよ」

そういう先生の後ろからヒョコッとニヤケ顔の柚子が登場。

それに呆れた顔を見せる俺。

ニコニコと笑顔を絶やさない先生。

「大丈夫!!先生が優しく指導して、あ・げ・る……(ポツ)」

「顔を赤らめないでください!!」

「裕也と先生の禁断の恋……(ポツ)」

「柚子も黙れッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

と、何があっても俺は二人には勝てず、仕方なしの最悪授業が始まった。

「大丈夫よ！間違えて学校に来てしまった人も授業を受けるから」

そういつてガラガラと教室の扉をスライドさせる。

中には俺たちを抜いて約7名いた。

そして、そのほとんどが顔なじみであった…。

「では、授業を始めます」

地獄の一時目スタート

第三話：一時間目（前書き）

今回は短いです…

第三話：一時間目

「さあ、一時間目が始めるわよ。適当なところに座ってください」

「ああ…はい」

「了解しましたですぜえ」

僕は適当に返事をして、柚子は僕以上な適当な挨拶を交わして席に着いた。

僕は何処にしようかなあ…と迷っていると何処からか声がした。

「裕也、俺の隣は空いてるぜ」

「竜…失礼するぜ」

声をかけてきたのは同じクラスの新井 竜だった。

竜とはあまり関わりが無いが、話したことはある。

そう、あれは確か 恋愛相談だった気がする。

好きな人は……………。

「ほうほう…ソヤツは私が…ほう…」

「ぬわっ…！だから、人の心を読むなあッ…！！…」

「ふふふ…良いではないかあ」

「どこぞの人だよ…」

「ゆゆゆゆゆゆ、柚子さんッ…！！」

「こんにちわ、竜君」

見ましたか…！今、一瞬にして顔が変わったよ…！

急に『女の子』に変わったよ！？キャピキャピしてるよっ…！！…！

！…！！…！！…！！

「???どうしたの、裕也君???」

「柚子さんは誰にでも優しいんですねッ!」

「そこ、竜!ちゃっかりスカートの中を覗くなッ!そして、柚子!お前は誰だ!」

「ひ、酷いわッ!?!幼馴染に対してその態度は無いんじゃないかな…(ぐずっ)」

本当に柚子という名の生物は恐ろしい…。

涙というものは自分で出せるものなのか!?

「お、お前ッ!?!何、泣かしてるんだよ!?!大丈夫ですか、柚子さん」

「ええ…ごめんなさい…(ギロツ)」

今、竜にばれない様にこつちを睨んだよね!?

今の目は恐ろしい…。本気で殺る、って目だったよ…。

「はい、そこ!?!授業中ですよ」

「あ、すみません…」

「先生!?!?!こんな授業は無意味だと思います!?!」

おお、竜が言ったぞ…さっきまで柚子に洗脳されていたのに…。

「何ですか??」

一気に場が凍る。

先生の顔は笑っているが、確実に怒っている。

その原因は分からないけど…。

「だって本当は今日は学校休みだったんですから、受ける必要は無
いと思います」

「ひ、酷いわッ！……！」

うおっ！…さっきの柚子と同じ状態だ…。

あれ、そういえば柚子がいない…。

「我輩はここである」

「うわっ！…何故、椅子の下に隠れるんだっ！……！」

「えー…気分」

「あ…そう」

「おやおやあー？…何、元気ないじゃん。どうしたの？…？」

「お前のせいだったちゃーの…！」

「あ、もしかして違う人に取り換えられちゃうって焦った？？」

「んなわけあるかつ」

おっと、柚子に氣をとられていたら先生たちはどうなったんだろ
う…。

先生はまだ泣いていた。

竜は呆然と立っていた。

ま、先生が泣いちゃったんだし…当然か。

「せ、先生は…ね、えー…ひくっ…」

「柚子、何とかしろよ…」

「まあ、待って。しばらくすれば裕也も突っ込みたくなるさ」

「????????」

突っ込みたくなるって…この状態でか？

何に對してだ??竜か??先生か??

「先生は、皆の、ため…にい」

「赤丸ジャ　プを買うのを我慢して授業してあげてるんだからあ！
！…！！…！！…！！」

教室内におもっ苦しい沈黙が流れる。
赤丸ジ　ンプって…いつていいのか…？
そして先生はしばらく泣いていた。

「という設定にしてしまうのかい？？」
「うをつ…！！人の心を読むなあ…！！」
「まあまあ……んで一時間目終了まであと30秒」
「え、もうそんな時間！？」

確かに秒針は6のところを過ぎ去っていった。
もうすぐ、終わるのかあ……こんな終わりかたで良いのかなあ。
そして

キーンコーンカーンコーン

第四話・二時間目（前書き）

さて、本編で裕也が問題をだします。

その答えは何でしょう。

答えはあとがきで

第四話・二時間目

キーンコーンカーンコーン

僕にとっての絶望のチャイムが鳴る。

それは、二時間目の開始の合図でもあり、僕の地獄の時間が始まる時間でもある。

休み時間の時も何にもすることがなくただ座っていた先生が急に立ち上がって号令をかけた。

「では二時間目を始めましょう!!」

そう言うと、着席の合図なしに皆一斉に座った。

それが何の意味か分からないままただ、僕のみが立っていた。

「裕也君がビリね」

「び…ビリ??」

袖子だけでなく、クラスにいる皆が僕を見て笑っていた。

「裕也君には何かクイズを出してもらおうわ」

「く、クイズ??」

「そう!!一時限目の時、聞いてなかったのね」

「まあ…いろいろあります…」

「じゃあ簡単に説明しますね」

これは有難い。

先生にも聞いていなかった原因はあるものの説明してもらえれば

…。

「ま、気張っていきいーや」

なんだ、そのやる気の無さはッ！
えーと、とにかく問題を…問題???
解けない難しいヤツ…。

「裕也君、早く」

「じゃ、じゃあッ…!…!…!…!…!」

「名探偵コナンで新一が飲まされた薬は何でしょう!…!…!…!…!
!…!…」

と、今度は先生の手が拳がった。

「きつと、『身体が小さくなる薬』よ!!ね??正解でしょう??」
「違います!!そのままじゃないですかッ!!」

そう突っ込むとまたさっきの二人組みが話し込んだ。

「今の突っ込みは微妙だなあ」

「そうか??いつも通りじゃないか」

「確かにいつも通りつまらないけどなあ…いつもよりつまんなかったぞ?」

もう何も話すことは無い。

さっきと言ってる事が違うんじゃないのか??

「まあまあ…つまないのはいつもの事じゃないか、裕也よ」

「うわっ!!お前はいつから教卓の下に隠れていたんだッ!!」

「ふふふ…企業秘密じゃよ」

「結崎ひのかっ!!」

「裕也は私がいって面白いんじゃないよ」

「はあ〜!?!」

「だあかあら、簡単に言うと柚子が一番面白いの」

グツ…そこらへんは否定でき無い。

確かに柚子が居るから僕が『突っ込み』おちう役割を果たせるわけだし…。

それに、確かに柚子のボケ この頃はボケじゃなくホンキでやっているように見えるが… は面白いし冗談がきつ過ぎる時もあるが…。

柚子がボケなかったら僕の意味は無いわけだし…。

ツていつか、柚子が原因だよな!?
僕はそう、平和が欲しいけど柚子が常識が無いから…あれ?…ど
っかがおかしいぞ??

「少年よ…その歳で何を悩む」

「お前の事でだよっ!?!」

「知ってる(笑)」

「だから、小説でしか表現できない(笑)を使うな」

「何を言っ!!漫画にだって表現できるッ!!」

ダメだ…悩んでる暇は無い…。

あっ、でもこうしていればきつと答えられずに済むかも…。

「あつ…でも柚子は心が読めるんだよな??」

「もちろんさ!!今までのことを『かくかくしかじか』で語ることも可能だ」

「要らない知識をありがとう。だったらこの答えが分かるんだよな??」

「答え?ああ…あぼ …ぐはっ…ゆうにゃよ、にゃにをしゅりゆんにゃ(裕也よ、何をするんだ)にゃぜ、くにをふしやぎゅ(なぜ、口をふさぐ)」

「答えてもらっては困るんだよ…ッ!」

「聞いたか??あぼ…って何だ??」

「あぼ…から始まるんだよな」

馬鹿野郎!!お前のせいでバレそうじゃないか!!
必死に柚子の口をふさぐ。

最初は抵抗してたものの、ついに抵抗しなくなった。

……殺ったか??

「生きてる」

「うをつ！早業で僕の腕から逃げるな」

「まあまあ…んで答えない代わりに何かチョーダイ」

「うっ…」

何故、こん時だけ頭の回転が速いんだ！

「えー…そういうキャラだから…（ポツ）」

「顔を赤らめる意味が分からん！！」

「ハイハイ。んで、なにくれるの??」

「わかったよ…今日の夜はカレーだから食べに来ると良い（ボソッ）」

「おかわりは??」

「自由だッ」

柚子はカレーが好物だから。

ひぐらしの 恵先生レベルじゃないか??

キーンコーンカーンコーン

やっと救いのチャイムが鳴る。

安堵して席へ向かう。

途中で先生とすれ違った時にこっちをニヤニヤ見ていた。

何だろうと思ったが、号令をかけたので直ぐにそっちに集中した。

そして地獄の二時間目は終わり、次は地獄の第三時間目……。

第四話・二時間目（後書き）

こたえは『アポトキシン4869』でしたWWW
ちなみに「4869」はシャーロックの意味があるんですよー。
ごめんなさい、知ってましたか??

第五話・締め

「では、裕也君には特別に女装してもらいましょう」
「はああああッ!?!?!?」

授業終了のチャイムが鳴る。正確にはなっている。
確かにこれは終わりを告げるチャイムのはずだろ!

「だから、裕也の男のプライドの最後だろう??」

「そこっ!?!?!どさくさに紛れて心を読むなあッ!?!そして、何
気に上手い事言ってるじゃねー!?!」

「そうよ、柚子ちゃん。お楽しみはココから、よ」

お楽しみとはなんだあッ!お楽しみとは!?!?!!

大体、僕の問題は答えられなかったじゃねーか!?!

「人生というのはそんな事だつて一度はあることなのよ??私もそ
うよ!?!そう、あれは私がまだ大人になる前の事かしらね」

「突っ込みにくいボケをしないでください!?!」

「裕也、君はうるさいなあ!?!。もっと静かに出来ないのか!?!」

「!?!え?なんで、僕が怒られてるの??」

そこが気になるよね??

だって、僕が突っ込まなければ誰か突っ込むんだよ!?!。
大変な事になるだろう???

「いや、柚子なら突っ込める!?!」(ドーーーーー!?!)

「いや、なに堂々と嘘ついてるの???しかも、ドーンっていらぬい

よね

「ドーンではない。ドーーーーー、だ」

「同じじゃん！……！」

「いや、微妙に『ー』の数と雰囲気……」

やっぱり、柚子に突っ込みという称号は似合わない。

「こういうのは実践になれば柚子の凄さが分かるってものだよ」

「……大丈夫かあ??」

「裕也の女装姿のほうが大丈夫かあ??」

「忘れていた事を引き出すなァッ!!」

大体の確率で突っ込みの人はいじられキャラになるわけだが、柚子がいじられキャラになるなつてないよ。

それに、柚子の突っ込みを想像すると絶対「なんでやねん」しか言わないってオチじゃないか??

うん、きつとそうに違いない。

そう、心中で決めていると、一人でボケている先生の傍に行つて言った。

「欧米か!?!」

いや、「なんでやねん」よりも使つてはいけないワードだよな!?

絶対、『Yahoo』や『Google』で欧米か!?!って検索すると「タカ&トシ」というお笑い芸人が出てくるんじゃないだろうか……。

……これはこれで良いんじゃないか??

先生、さつきから同じ事しか言っていないし、柚子も「欧米か!?!」って連発してるだけだし……。

突っ込む相手がいないと結構ラクなんだな……。

ッていつか、柚子は「欧米か!!」って言いたかっただけじゃないのか??

しばらくすると短いため息をつきながら僕の元へと柚子が帰ってきた。

「ん??どうした??もういいのか」

「うん。飽きた」

あれだけ、突っ込みは任せろって言っていた人の台詞じゃないよね??

やっぱり、突っ込みはボケの人がやっっちゃいけないな。

「柚子が突っ込むとスベるもん」

「そりゃあ、欧米か、しか言つて無いもんなあ」

「いろいろ言っている裕也もつまんないけど…」

「…うん。今のは軽く言っっちゃいけないぞ」

「柚子にだって、そのぐらいの区別は付くよ」

自覚していつてたんだ…。

最悪だ、コイツ…。自覚ないならまだしも自覚してるなんて最悪だよ。

と、柚子がなにやら自分のバックを取り出し何かやってた。

「なにしてるんだ??」

「飽きたから帰る」

飽きたって…突っ込みもそうだけど学校自体飽きたのかよ…。
最悪なヤツだよ、まったく。

「まあ、いいや。僕も帰るわ」

「ほう???そんなに柚子様と帰りたいのか???」

「なんで、そんなに自意識過剰なんだよ!!!ってゆーか、ちゃっか
り自分に様をつけるな!!!」

なんやかんやで、僕たちは教室を後にした。

僕たちが帰ってから、何時間か経過し、もう日も暮れて一般では
夜と呼ぶくらいの時間帯。

さすがに、先生や皆は帰っただろう、と考えていた。

「私はねえ、そう教師をやる前だったかしら。先生なりに頑張って
生きてきたのよ???なのに、大学に6回も落ちるってどういうこと
かしら…。説明して欲しいぐらいだったわ」

「それはきつと、先生が馬鹿だったって事だよ。きつと」

「そうですね、保険の先生が馬鹿でいけないことは無いんですよ！

「！」
「そうだぜ！！なあ、皆！！」
「」「」「ああ！！そうだ！！」「」「」
「みんな、ありがとう」

まだ、学校で寸劇をしていた。

第六話・休日

さてさて、時は変わって私腹の土曜日になった。

学校もないし、袖子もないし…一番好きな日

なはず。

「何をしている、裕也。私は客だぞ!!」

「いつからお前を客と認めた。完璧な不法侵入者だぞ…」

いつものように袖子はそこにいる。

いつからと聞かれたら答えは『知らん』だ。

当たり前のように居る。

これは事実。

そういえば、あのあと先生たちは夜が明けるまで（正確には一日中だな）学校に居たらしい。

みんなが登校する時間になったとき僕たちのクラスにまだ先生たちが居たところには僕も目からウロコが落ちた。

「裕也よ…嘘を教えちゃいかんなあ。うん、嘘をおしえちゃいかなあ」

「何で二回言うんだよ…。嘘なんて言っていないだろ」

「目からウロコなんか落ちてないだろ!!」

あれ??なんで怒られたの、僕…。

っていうか、実際に目からウロコが落ちたら怖いんだけど…。

「そういうのは『目からコンタクトが落ちる』って言うんだ!!!!」
「リアルすぎて例えになつとらんわッ!!!!」

しかも、僕コンタクトしてないし。
それに、突っ込んではないけどちょっとかり心の中読んだよね？

「んで、何しに来たんだよ」

「荒らしに」

「帰れ」

本当に何しに来たんだよ、コイツ…。

「やだなあ、ジョークにきまつてるだろう」

「お前が言つとんでも現実味が湧くんだよ…」

「そんなことするわけ無いだろ??…よっこらせ…」

バサバサ

僕の机の上ののっていた教科書や参考書、本やプリントなどが
袖子の手でぶちまけられる。

「つて!!!…さっそくなにしてんだよ!!!やりながら言っても、
説得力ねーよ!」

「これは『荒らしてる』んじゃない。部屋を『汚くしてる』んだ」

「ある意味、一緒じゃねえか!」

「違う!!!…ビヨンセ? ニュヨンセ??」

「……ニュアンス??」

「…が違うんだよ」

僕に言わせてどうする…。

しかも、始まりはビヨンセかよ。ニュヨンセって韓国人みたいな
名前だな、オイ。

まったく、ユカイな話だぜ…。

「本当だな…」

「お前のせいだよ…。つか、なんで僕は慰められてるんだ??」

「さあ??それより、裕也の部屋はこつも汚いのか??」

「お前のせいだろうが!!」

普段は普通に綺麗なんだが…。

床一面に広がったプリントや教科書類などのせいで汚くなっちゃまった。

しかし、これでとまる柚子ではなかった。

クローゼットの引き出しを全部引っ張り出し、服を散らかす。

「おま…本当にやめろよッ!!」

「何を言う…まだ、途中ではないか!!」

「途中だから止めてんだよ!」

「裕也はいつも言うではないか…。『何でも良いからお前は物事を最後までやり遂げてみる』…と」

「それは、お前がなんでもかんでも途中で投げ出すからだろ!!」

「中途半端じゃないぞ。ちゃんとどれも出来るぞ」

「…クッ…」

柚子はある意味、神様に愛されているから才能には恵まれている。何にチャレンジしてもできる。あ、突っ込みみたいな性格的な問題があるのは別だが。

皆が言うには、『容姿端麗』で『頭脳明晰』だ。

俺から見れば『人格崩壊』と『馬鹿野郎』だ。

柚子には後者の方がピツタリだとは思わないか??

「ひどいな…裕也は私のことをそういう風にみていたなんてな」

「ああ。ピツタリだとは思うがな」

もつ心を読むことに関しては突っ込む事を止めてみた。

「裕也のを作ってみたぞ」

「探してみたじゃなくて、作ってみたってところに若干、不満があるんだがな…。言ってみろ」

そして、一呼吸置いて柚子は言った。

「そうだなあ…『影薄漫才』と『変体親父』ってのはどうだ？」

「ちよつとまとめてえいッ！！許す、最初のは許す。影が薄いのは本だからだ！！しかしッ！！その後は聞き捨てならんぞ！！なんだ、変体親父って！！！！！！！！！！」

「ピッタリだろう??」

「何処がだよ！！」

センス云々ではなく、変体じゃない。親父じゃない。まだ、心も身体も子供だ。

決して、変体ではない。命を懸けて良い！！

「そうか、じゃあ死ぬ…」

「なんで！？本当の事を言ってるのに死ななきゃいけない理由が見当たらないよ!?!」

まず、柚子の憐れむ目が気になるんだけど…。

「じゃあ、遠慮なしに…そりゃ」

「へ??…ちよッ！！何で、カッターなんか僕に振り下ろしてるのさー!」

「大丈夫…頭と心臓は狙わない」

「いや、殺さない意味では通じるけど、今の状況だとジワジワと殺

たしか、一回の料金が10万ぐらいだった気がする。
それに、人気だから予約は1年先ぐらいじゃないと出来ないとか。
ゲームは別の個室にあるらしい。見たことはないから、確証は得
てない。

「ふふふ…それが、出来るのだよ…。柚子にしてみれば赤子の首を
捻るように…」

「赤子の首は捻っちゃダメだって！死ぬよ、赤子が死ぬ！」

そういえば、柚子の家はお金持ちだった。

たしかに、そんなお金持ちが頼めば逆にゲーセンも嬉しいだろう。

「そうなんだ。家にそのゲームの本体が置いてあつてな…」

「へー、すげーじゃん」

「だから、誘いに来たのだ」

うん、それは先に言ってほしかった。

第七話・準備

そして、一転してここは柚子の家の大広間。
さすが、金持ちの家…なんていうかでかい。

天井にはシャンデリアがぶら下がっていて、そこらじゅうがキラキラと輝いている。

しかも、執事やメイドがいる所にやたらと気になる僕。

だけど、もつと気になるのは放し飼いにしてあるあのタマ。

「さあ、裕也ここだ。……どうしたのだ??」

「いや…こんな綺麗なのになんかタマだけが妙に浮いているから

…」

「ははは。あーおもしろいなあ（棒読み）」

コイツ…僕を馬鹿にしてるだろ…。

あー、はいはい。どうせウチの家は普通ですよ。特に親なんかは父親は決まった時間 多分、朝の七時ぐらい に出てって夜の八時くらいに帰ってくる規則正しい生活。職業はごく普通の会社に働くごく普通の会社員だ。課長でも社長でもない。

母親はいつも家でグータラ…。夜はコンビニのパートだ。

普通すぎて柚子なんて腐ってしまえば良いのに、と思う。

詳しく言うと金持ち全員くたばって死ねば良いんだ。

「そうか??そんな裕也の母上と父上も好きだが…」

「さいですか。僕はお前両親が羨ましいよ」

柚子の両親は基本的、甘い。

柚子が欲しいものは何でもあげるし、柚子が望めばなんだったす

る。

簡単に言つと親ばかだ。

そんな両親が欲しかった。

強いて言つなら僕の家は貧乏だから、欲しいものは自分で買えと言われる。

最後に親から物を買ってもらったのはいつだっただろう…。

高校生にもなるとバイトとかが出来るようになるが、やり始めると柚子がいつも邪魔をする。

客としてきて、店員や店長にちよっかいを出したり、一緒に働いて皿を割つたりするなんて事も僕が怒られる。さすがに、金持ちの子は怒れないのであろう。

でも、なんで僕が柚子の尻拭いにならなければならないのだ。

僕は柚子の保護者では無いのに…。

そう思つと急に泣けてきた…。切なくなつた。

「なに、ないているのだ？馬鹿か、馬鹿なのか？」

「半分はお前のせいだつーの」

「思い当たる節がありすぎて話にならん」

「自覚はあんのかよッ！！」

そうだった。自覚があるからこそコイツは最悪なんだつた…。

自覚がなしでも最悪だけだな。許される領域をとつくに超えているから。

そういえば、この前もどこかでこんなこと言つた気が…。

「裕也、そういえば最近ツツコミに手を抜きすぎじゃないか??」

「あん?…まあ、注意しても止めないからな、お前は」

「いいじゃないか、心を読むぐらい。別に変なこと考えているわけではあるまい」

「そうだな、お前のせいで悩む事もろくに出来なくなつたよ」

そして、また大きいため息を吐く。
目の前にあるおもつ苦しそうな扉を目の前に繰り広げられる。
本当に漫才をやっている気分だ。

「えー…夫婦漫才？」

「僕と柚子はいつから夫婦になったんだよ」

「生まれたときから」

「そんな設定、ありがたくも何にもねーわッ！！」

「う・そ・つ・け」

嘘じゃないんだけど…。

なんで、柚子の旦那として嬉しく思わなければいけないんだろう…。

僕達はとりあえず部屋に入ることにした。

実際に部屋の前で繰り広げられる僕達ははたから見ても変な人たちだっただろう。柚子が心を読むのだからとくにだ。

部屋に入ると、そこには見覚えのある一人の男子が…。

「よっ、裕也。先にお邪魔してるぜ」

「り、竜??？」

やはり、僕の見る目は確かだった。

竜は馬鹿だ。柚子並みに馬鹿だ。

なんで、柚子の家に当然のように居座る…。

家に居るのはまだ、よしとしよう。僕は関係ないから。

しかし、何故に自分の家でもないのに柚子の家のメイドさん（家政婦さんなのかな）をこき使うんだ??

突然来たならそんなの分からないだろうが、それが誰でも見たらすぐ分かるだんあ…。

何処の南国の王様気取ってんのコイツ。

竜の周りに四人ぐらいのメイドさんが囲み、うちわで扇いでもらったり肩を叩いてもあつていたり…一言で言うともムカつく。

しかも、柚子の事好きな奴がそんな事してたら幻滅食らうたる…。

「んふふ…裕也よ、私を甘く見てもらっては困る」

「お前は俺を困らせてるんだからたまには自分も困れよ…」

「柚子はな、裕也が裸で柚子に告白してきても幻滅はしないぞ!!」

「いや、しろよッ!!」

そこまでいくと、変質者が出た時にどう対処するんだよ。

「えー…ホラ、柚子って嫌われるタイプじゃん??」

「まあ、性格が性格だからな」

頭良いし、容姿が綺麗だからひがむ人はもちろんの事いる。

しかも、柚子の場合は八方美人だし…。

「え?八方美人って何??四方八方から見ても美人ってこと??」

「絶対分かってるだろ…」

「うん」

肯定が早過ぎだ。

そんな早すぎても僕がどうして良いんだよ…。

「まあ、話を戻すけどさあ」

「どうぞ、戻してください」

っていうか、柚子がそんな事いうなんて珍しいな。

今日は雨か、なんて思ってしまう。

「んでさあ、柚子の事を好きな人は少し変わってるじゃん??それか、柚子を狙ってる人」

「若干のナルシ発言が入ってる気がするんだが…まあ、さっきのが残ってるから許してやるよ」

「たとえば、裕也みたいな人はさー柚子の事大好きじゃん??」

「ほお…僕の何処が柚子大好きか教えてもらおうかあ…」

僕と関わるな。むしろ、他人で居てくれ。

幼馴染じゃなかったら、コイツを殴りとおすぞ…。

「それは無理なことだぞ。柚子は心を読めるのだから」
「うをつ!?!また読んだな」

「だって、読んでくれと顔に書いてあつたぞ??」

「書いてねーよ」

「そう言うと思ってさっき書いておいた」

その発言を聞かやいなや自分の顔へと触れて確かめてみる。
すると、急にニヤニヤと柚子が笑い出した。

……はめられた。

それだけが虚しく僕の心に響いた。

「おい、裕也。俺も混ぜてくれよー。一人だけ柚子さんとウツハッハしようだなんて…そうはいかねーぜ」

「なんだよ、そのウツハッハって」

「そうだよ、混ぜてあげてよッ」

なんで、柚子は急に『女の子』になるんだよ…。

竜も入ってくると、突っ込めるものも突っ込めなくなる。

つか、二人いっきにボケられるのが一番困る。

「んで、竜はなんでここに居るんだよ」
「よくぞ聞いてくれた!!!」

あ、地雷踏んじやった…。

「それが、柚子さんに呼ばれたんだよ…。分かるか、この俺の気持ちだ!!!」

「わからねーし、わかりたくもない」

「本当はわかるくせにいー」

「部屋荒らされたのにどうやってそんな気持ちが出て来るんだよ」
「気合だツ!!!」

そこで、言葉をハモられても…。

と、ギィと短く音がしたかと思うと部屋に人が入ってきた。
見覚えのある人…柚子のお父さんだった。

「お集まりの方々（三人だけど）今日はバーチャルゲームを楽しんできてくれたまえ」

ようやく、本編が始まるうとしていた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5900h/>

夢学園

2010年10月14日01時51分発行